

第1回長野市スポーツを軸としたまちづくりのための政策懇話会 意見交換概要

日 時	令和7年8月4日（月） 午後3時30分～午後5時30分
会 場	長野市役所第一庁舎5階 庁議室
出席者	委員7名、進行、関係部局、事務局
次 第	1 開 会 2 座長挨拶 3 委員紹介 4 説 明 ・長野市のポテンシャル ～データから見て取れる長野市の潜在“特性”と“優位性” 5 意見交換【非公開】 ・合宿や大会誘致等、スポーツと観光の融合による地域活性化策 ・大規模スポーツ施設等の価値最大化に向けた利活用のあり方・方針 ・社会課題の解決と地域活性化に向けたプロスポーツチームとの共創施策 6 閉 会
議 事	【合宿や大会誘致等、スポーツと観光の融合による地域活性化策について】 ◇ 合宿誘致に関して、これからJリーグのシーズンが移行することによって、6月～8月がキャンプシーズンに変わっていく。飯綱高原をキャンプ地としてチームを誘致することは、新たな価値（観光誘客、ユース世代等の合宿・大会誘致、Jクラブテストマッチの開催と放映など）をたくさん作っていくことができる。 ◇ 北海道では、コンサドーレ札幌が設立したまちづくり会社「まちのミライ」が中心となり、各自治体等が参画し、キャンプ誘致を推進する母体「北海道サッカーキャンプコネクション」を設立し各種調整を行っている。 ◇ このような状況の中で、飯綱への誘致は、スピード感を持ってやっていかないといけない。早急に、グラウンドの整備を行い、誘致ができる環境を整えていくべき。また、グラウンドの整備も当然だが、地元での宿泊等の受入れ環境の整備、各種調整機能を有する母体の組織化など、そういったものをどのように作っていくかも早急に考えていかなければいけない。 ◇ キャンプ地、合宿・大会等の誘致で圧倒的に長野が他市と差別化できるのは、東京からの近接性、新幹線などの交通アクセスの良さである。PR、売り方によって、十分差別化でき、勝てる戦略を作ることができる。 【大規模スポーツ施設等の価値最大化に向けた利活用のあり方・方針について】 ◇ これからのスポーツ施設の改修や新設を考えていく際に必要不可欠なことは、将来を見越した使い方、施設が提供するサービスやコンテンツ、周囲への波及効果によるまちづくりなどをイメージして具体的に設計するべきである。 ◇ 今の世の中のマーケティングを考えた場合、スペックの差別化はすぐに真似されてしまうので、ストーリーで差別化をしなければならない。長野市は、長野五輪、善光寺を代表に豊かな歴史・文化、自然環境などストーリーを作るうえでは他市には無い圧倒的な強みを持ってお

	り、それを生かさない手はない。 ◇ 善光寺への参道は歩道が拡幅され、木造の灯籠など今なお歴史・文化の雰囲気街中に残っており、地方都市でメインストリートの活力を維持できている都市。権堂の裏路地にお店が入っており、そこにも波及が出ている。長野駅東口の開発を考えたときに、このメインストリートにどのように焦点を当てて活性化させていくのかを、一番に取り組むべきである。 ◇ 人口減少化でのまちづくりを考える際に、地域のメインストリートの活性化の手法として、例えば車道を1車線廃止し、そこを公有地化して人が往来しやすい環境を生み出すなど、従来にはない新たな視点での検討も必要である。 ◇ まちづくりの観点で札幌ドームを例にとると、駅から札幌ドームへの道にお店がなく、まちの賑わいが作れていない。これは、PPP（公民連携）を統括するプロデューサーが不足していたからだ考える。長野にはこれだけの資産とストーリーがあり、ポテンシャルを持っている。これを公民連携でやっていくのであれば1つ意識しなければいけないのが、そのエリア全体をプロデュースする機能をどう具体的に構築していくかということである。 ◇ 佐賀アリーナは国スポを契機に建設し、今は周辺のエリアへの波及効果を出すべく取り組んでいるが、佐賀アリーナと駅東口・ビッグハットの類似性は平坦さである。駅から2～3キロ位の距離であり、歩くことも可能な場所で、エリア内の交通をどのように提供するか新たなチャレンジができる場所でもある。 ◇ ビッグハットの活性化には管理・運営が肝になってくる。東京も含めたコンテンツをどのように持ってくるのか、平常時とイベント時がある中でどのような使い方をするのか、ビッグハットの潜在能力、可能性がどのくらいなのか、市内の他の施設に何をさせるのかというバランスの中で議論して、全体像を描いていく必要がある。 【社会課題の解決と地域活性化に向けたプロスポーツチームとの共創施策について】 ◇ 長野のまちづくりにおいて挑戦していただきたいのは、LAVB（Local Asset Backed Vehicle）という手法。地方公共団体が土地を現物出資して、SPCをつくり、そこに民間事業者が金銭出資をして、連鎖的にまちづくり開発をするという、公民連携の最新の手法である。 ◇ プロスポーツチームについては、根本的に強くないと市民や協賛企業などは盛り上がらない。一方で、これからチームがやろうとしていることが、どのように繋がって経済効果を生み、魅力あるまちづくりに繋がっていくかということが示せれば、市内企業なども一緒にやってみようという機運を醸成できる。 ◇ チームが強くなるために選手をどう獲得するかという際に、やはり施設の充実度などの地域の環境も決め手の1つになる。選手とチームの交渉の際には、お金だけじゃない要素をどれだけ用意できるかということも今回のテーマとなる。 【スポーツを軸としたまちづくり全般について】 ◇ 市役所の中での様々な課題を、どういう手法でどう解決していくのかを考えることが重要である。そこに対して市内外からの人材育成と、長野市役所内のありとあらゆる課題をどういうふうに連動させていくのかということを議論したほうがよい。スポーツから考えるのではなく、行政の
--	---

	他の課題を発射台にして、それらをスポーツとどう関連づけて解決策を考えるのか、ベクトルを逆にした議論もあわせてやったほうがよい。 ◇ 南長野運動公園周辺については、今後人口減少が進む中で、運動公園右側に居住誘導区域をしっかりと残してある。その中で産業立地ビジョンがはめられ、さらにスポーツのコンテンツ・施設の有効活用が入ってくると、この篠ノ井を中心としたエリア全体でどういったまちづくりをするかという長期的なランドデザインが必要ではないか。その上で南長野運動公園や周辺エリアにどう投資をするのかという議論をしていく必要があるのではないかな。 ◇ スポーツはある種、取っかかりでしかない。今回のまちづくりの中でも、それをまず取っかかりにして、人が集まる、ハブ機能として企業を繋げていくなど、その力はすごくある。そこから経済の活性化、健康、教育などどのように地域の課題を解決していくか、各エリアの特性を生かしながら面で捉えて取り組んでいく必要がある。面で捉えて周遊させることができるポテンシャルがあるのに、なかなかそこまで届いておらず、もったいない。 ◇ 地域での公民連携の推進役として、第3セクターの機能に再度着目するべきである。90年代に第3セクターの失敗の問題が噴出したが、その後各種法制度等の見直しと検査強化も進み、現在の第3セクターはガバナンスがしっかり構築できているのが実情。PFIのコンセッションなど、もう一度第3セクターを使い直していくというのはあるべき考え方である。さらに、そこに住民出資を入れることによって、住民が主体的にプロジェクトに参加するようになり、1つのガバナンスとして地域の公民連携の形ができるのではないかな。スポーツという分野はこれがすごくやりやすい分野である。
--	--